

おおのじょうこども食堂みずほまち

1. 団体概要

NPO 法人チャイルドケアセンター※が運営する子供食堂

※平成 13 年設立。大野城市からの委託を受け、放課後児童クラブ、ファミリーサポートセンター、未就学児と保護者の交流事業、子育て活動サークルの勉強会・交流会のためのネットワークづくり等に取り組んでいる。自主事業として、無料の子育て情報誌「びい〜んずキッズ（隔月刊；5 万部）」発行、ベビーシッターなど子育て支援、中学校や大学と連携した子育てサロンを開催

開催場所；西松建設 平和寮 社員食堂

開催日時；毎月第 2 土曜日

参加費；子供、大人とも無料

参加者数；70 名程度

・大野城市が所在する福岡県筑紫地区の 28 か所の子供食堂をつなぐ「ふくおか筑紫こども食堂ネットワーク（以下「筑紫こども食堂ネットワーク※」という）」を運営。

※地域の公民館主催の子供食堂、PTA 会長らが主催の子供食堂（文中の「春日 奴国の里ふれあい子ども食堂」）、地域高齢者の居場所づくりとタイアップしている子供食堂（文中の「たまり場ころん」）等、多様な形態の子供食堂が参加し、運営継続に役立つ情報の共有化等に取り組んでいます。

・筑紫地区の団体が子供食堂への食材等の寄付の受付、保管・配布を行う子供食堂支援に特化した「ふくおか筑紫フードバンク（以下「筑紫フードバンク」という）」を運営。

2. 取組のきっかけ

■ 子供食堂を始めたきっかけ

・子育て支援等様々な活動を展開してきた中で、近年は孤食の問題が広がっており、誰かと温かいご飯を食べるという経験が少ない子供や、コミュニティとのつながりが不足している子供がいることを感じ問題と考えました。そこで、食を中心とした居場所づくり、という視点で子供食堂を開始することにしました。

・構想を練り始めた頃は、子供食堂は貧困支援という報道を多く見聞きましたが、貧困支援ではなく、子供の居場所づくりとして取り組みたいと考えていたので、子供食堂の記事を書いた記者に一般的な子供食堂の考え方について聞いたところ、必ずしも貧困支援が目的とは限らないとのことだったので、自分たちなりの子供食堂を立ち上げてみようという気持ちで始めました。

・初回の子供食堂は、市内のコミュニティセンターにある広い会場で実施しました。開催の前日に新聞で「市内初の子供食堂 明日開催」という記事で取り上げられたこと等が影響して、市長を始め、市議会議員、関心を持った他の法人職員、報道陣等、大人が殺到してしまい、子供も含めて、約 300 人が参加するイベントとなってしまいました。

- ・市長が「市として子供食堂を応援したい」と発言したことが記事になる等、プラスの効果もありましたが、子供たちも落ち着いて食事をする事ができず、私たちの考える子供の居場所づくりという当初のコンセプトからは大きく異なる結果でした。
- ・このため、「子供が自分の足で行ける小学校区内で」「継続的に開催されるような」規模の小さな子供食堂を開催しようと、方向転換し現在に至ります。

■ネットワークづくりへ取り組んだきっかけ

- ・子供食堂の運営を始めてしばらくした頃、大人も子供も一緒に集まる場をつくりたいがどうしたらよいか、と相談を受け、子育て支援事業や子供食堂を運営してきた経験を生かし、公民館の館長を紹介したり、近隣の小学校に連絡をとったり、SNS を通じて協力者を募る方法を伝授したりと、子供食堂の立上げを支援しました。
- ・この出来事をきっかけに、子供食堂を地域に増やしていくために、やってみたいと考えている人を後押しする組織が必要だと考え、筑紫こども食堂ネットワークを立ち上げました。
- ・西日本新聞からの寄付で、炊飯ジャー・大鍋・茶碗・コップ・トレイ・お箸・衛生用品等、開催時に必要な備品を整備し、子供食堂が開催しやすくなるようレンタルを始めました。

■フードバンクへ取り組んだきっかけ

- ・ネットワークを作り、子供食堂の運営、立上げ支援を行う中で、企業等から寄贈された食料を保管し、必要とする団体に提供する組織が必要だと考え、市内・近隣市の子供食堂を支援する筑紫フードバンクを立ち上げました。子供食堂へ積極的に食材提供を行うためには、常温で保管できる食材だけでなく生鮮食料品の取扱いも必要でした。そこで、私たちは新鮮な肉・野菜を提供することが可能になるよう、グリーンコープやエフコープ等と協力体制を整えてきました。フードバンクとして、子供食堂の運営に協力していく意義は大きいと考えてきました。

3. 食育の取組

①多様な暮らしに対応した食育の推進

- ・地域のボランティアスタッフ等の親以外の大人とご飯を食べる中で、座り方等のお行儀を自然に注意される。子供たちも反発することなく素直に聞き入れられる場となっています。（「おおのじょうこども食堂みずほまち」の例）
- ・家や学校以外の居場所での、多様な世代との交流の中で成長してほしいと思って活動しています。高齢者にとっても、世代間交流できる時間は生きがいです。地域の高齢者と子供たちが顔見知りとなることで、将来、認知症による迷子等が発生した際にも、声かけて支えてもらえる可能性もあり、活動に参加している高齢者にとってもメリットがあります。（筑紫こども食堂ネットワークに加盟する「たまり場こころん」子供食堂の例）

- ・運営の目的に貧困対策は掲げず、あたたかいご飯を皆で食べる経験を積む、食事や人との接し方等のしつけの場とする、地域に顔見知りを増やす等の目的を掲げています。初回の参加時にはあいさつもできなかった子供が、顔見知りになるにつれ、元気よく声を出せるようになっていきました。料理を作った高齢者に対して「ごちそうさまでした！」「おかわり！」と話しかけている姿がみられます。（筑紫子ども食堂ネットワークに加盟する「春日 奴国の里ふれあい子ども食堂」の例）
- ・食事の際には、各テーブルに、子供に加えて地域の高齢者やボランティアスタッフ等が1人以上配置されるよう、意図的に席を誘導しています。そのため、大人と会話をしながら食事をする環境が生まれています。ご飯は残さないで食べるんだよ等と声をかけられながら、楽しい雰囲気です。楽しい雰囲気です。（筑紫子ども食堂ネットワークに加盟する「春日 奴国の里ふれあい子ども食堂」の例）

②食文化の継承に向けた食育の推進

- ・メニューは調理をする高齢者とともに考えるので、魚のすり身の汁物等、自宅ではなかなか食べられないような和食も登場します。子供たちに幅広い食事を体験してもらいよい機会となっています。（筑紫子ども食堂ネットワークに加盟する「春日 奴国の里ふれあい子ども食堂」の例）
- ・食事のメニューは毎回、白米、梅干、味噌汁、おかず、というシンプルなもの。温かいご飯を皆で食べるという目的を大切にしています。（「おおのじょうこども食堂みずほまち」の例）

4. 地域との連携等による課題解決

（1）来てほしい人や家庭の参加（主要課題①）

- ・おおのじょうこども食堂みずほまちの所在地を学区とする小学校で、全校生徒にちらしを配布したり情報コーナーにおいていただいています。放課後児童クラブの運営を通じ学校とのつながりがあったことから、協力をいただくことができました。通常 70 人前後の子供の参加者が、ちらし配布直後は 100 人以上になり、効果が見られます。
- ・対象を子供に限定しないで、高齢者や障がい者、親子連れ等、地域の多様な人々の交流の場という機能を持つ子供食堂を通して、特別な支援を必要としている子供の存在に気付いたり、専門機関につなげられるような視点を持つことも必要だと感じています。

（2）資金の確保（主要課題②）

- ・西日本新聞を始めとするメディアが取上げてくれるおかげで、取組が広く知られるようになり、多くの方々から寄付をいただいています。
- ・筑紫フードバンクでは、企業、生協（エフコープ、グリーンコープ）や地域の農家（個人・むすび庵）、一般の寄付等で得られた食材を管理しています。筑紫子ども食堂ネットワーク加盟の子供食堂は、毎回食材が手に入るため、購入する食材は少なくてすみ、費用を抑えることができます。
- ・筑紫フードバンクに対して大野城市から大型の業務用冷蔵庫の購入補助を受けました。
- ・全国・海外からも寄付が届くようになり、食材だけでなく備品整備や衛生用品が充実してきました。

- ・フードドライブで食材の寄付をいただいているギャップジャパン株式会社から、子供食堂の活動に対する運営資金の寄付へと支援が広がっています。

(3) スタッフの負担、スタッフの確保 (主要課題③)

- ・子供関連で展開している様々な事業にボランティアスタッフとして参加・登録いただいている多くの方々に、子供食堂にもボランティアとして参加していただくことで、十分なスタッフを確保できています。

(「おおのじょうこども食堂みずほまち」の例)

- ・多様なメニューを提供したいというスタッフの声もありますが、無理をして子供食堂の運営が継続できなくなってしまうので、継続を第一とし、メニューの固定化により、メニュー考案や食材の調達、調理の負担を減らしています。(筑紫こども食堂ネットワークに加盟する「春日 奴国の里ふれあい子ども食堂」の例)

(4) 地域との連携 (主要課題④)

- ・チャイルドケアセンターでは、筑紫こども食堂ネットワークに加盟する子供食堂を、地域の小学校や保健所とつなぐなど、子供食堂開設支援を行っています。
- ・SNS を利用し、筑紫地区の子供食堂の活動を紹介しています。

(5) リスク管理 (主要課題⑤)

- ・保健所の指導のもと、衛生管理には気をつけています。初回の子供食堂開催時には、衛生管理について注意が足りず、おにぎりを提供したのですが、その写真が新聞記事に載り、保健所から衛生管理について問合せを受けた経緯があります。保健所からは「子供食堂は応援したいので、事故を起こさないように気をつけるべきところは気をつけましょう」というスタンスで丁寧な指導を受けました。法人としても、子供食堂の担当者が食品衛生責任者養成講習会を受講する等、対応を重ねています。

(「おおのじょうこども食堂みずほまち」の例)

- ・筑紫こども食堂ネットワークの中で、アレルギーの確認方法や、衛生面で気をつけるべきポイント等のリスク管理に関するノウハウも共有化しています。

(6) 会場の確保 (主要課題⑥)

- ・「おおのじょうこども食堂みずほまち」の会場は西松建設(株)九州支社の独身寮1階の社員食堂および厨房を無償で借りています。食材や備品の保管場所も、現在は利用していない管理人室を無償で使わせていただいています。筑紫フードバンクが市の補助を受けて購入した冷蔵庫の設置場所にもなっており、フードバンクに寄付された食材(冷凍、冷蔵、常温)が保管されている他、フードバンクから各子供食堂に貸し出す食器や炊飯器、鍋等の調理器具も保管しています。

⇒詳細は「◎西松建設株式会社の協力による、会場の確保」参照



(左) おおのじょうこども食堂みずほまちの開催時の様子、(右) 西松建設に配置している大型冷凍庫

・筑紫フードバンクは、エコーブ生活協同組合から、①お米を中心に常温保管可能な食材の組合倉庫（大宰府支所）における保管、②フードバンクを利用している子供食堂の連絡会議における食品衛生勉強会への講師派遣等の支援を受けています。



(左) (中) エコーブにて冷凍商品等を保管している様子、(右) 筑紫フードバンク利用団体連絡会の様子

・以上の支援について、筑紫フードバンクは、西松建設、エコーブと支援の協定書を交わしており、平成 28 年 11 月に大野城市役所で協定締結式を行っています。



「ふくおか筑紫フードバンク」事業に関する協定締結式の様子

5. おおのじょうこども食堂が必要としている支援

- ・子供食堂の開設支援・ネットワークやフードバンクの運営費は、当団体の持ち出しになっています。子供食堂が流行だけで終わることなく、継続的な活動にするためにも、ネットワークのための取り組みに対する理解をお願いしたいところです。
- ・メディアからの取材申込みが多いですが、子供の貧困支援活動という位置づけでの報道を目的とされる場合が多いので、すべての子供を対象とする食を大切にしたい居場所づくりというコンセプトを理解してもらえない場合には、取材をお断りせざるを得ないこともあります。居場所づくりとしての子供食堂という考え方を多くの人に知っていただきたいと考えています。
- ・大野城市では公民館活動が活発で、年間スケジュールが立て込んでいるため、子供食堂を年 1～2 回しか開催できないところも多いです。しかし、イベントに合わせて、子供食堂を開催する公民館も増えてきたということは、「食を通じた居場所づくり」というコンセプトにも重なるのではないかと考えています。

◎西松建設株式会社[※]の協力による、会場の確保

※1874年創業、従業員数約2,500人の建設事業・開発事業・不動産事業等を営む会社。

福岡市内に九州支社福岡営業所があり、男性社員向けの独身寮が大野城市に立地。

CSR活動に熱心に取り組んでおり、地域・社会への貢献として「企業市民としての積極的社会参加」をビジョンに掲げています。

1. 取組のきっかけ

- ・九州支社の当時の総務部長が新聞で子供食堂の存在を知り、会社として協力できないかと考え、新聞で紹介されていたチャイルドケアセンターにボランティア活動による支援の相談を持ちかけました。
- ・チャイルドケアセンターから子供食堂を継続的に使用できる会場がなくて困っていること、食材や備品を保管する場所が不足している等の説明を受け、大野城市の独身寮1階の土日祝は利用されていない社員食堂の提供を申出しました。
- ・東京本社のCSR担当者と調整し、CSR活動の一環として、独身寮の食堂と談話室を子供食堂の開催場所として提供すること、旧宿直人室を食料や備品の保管庫として提供すること、場所を利用するにあたってのランニングコスト（電気代等）は会社として負担することを決めました。
- ・検討を始めてから会社として協力することが決まるまで、半年ほどの準備期間を要しました。

2. 連携の仕組み

- ・独身寮の食堂と談話室、調理場を、月に1回開催される子供食堂のために提供しています。
- ・食材や備品の保管場所も、現在は利用していない管理人室を無償で提供しています。筑紫フードバンクに寄付された食材の保管場所、食材を保管する冷蔵庫の設置場所となっている他、フードバンクから各子供食堂に貸し出す食器や炊飯器、鍋等の調理器具の保管場所としても使われています。
- ・子供食堂が開催される日には、社員の有志数名で、食堂の机を移動するなど会場設営や撤去作業を手伝っています。
- ・寮に住んでいる社員には、CSR活動の一環として食堂を子供食堂に提供すること、子供食堂開催時間中は食堂の冷蔵庫等を利用できないこと等を周知しています。社員からの反対の声はこれまであがりません。短期間で入れ替わる社員も多いため、開催前に毎回周知しています。
- ・子供食堂として寮を開放するようになって、地域の中に顔なじみの住民が生まれました。これまで何十年も隣近所に生活していた住民と初めて話ができた社員もいる等、会社が開かれた存在として地域に根づくことに、子供食堂への協力がひと役買っています。

3. 課題・今後の方針

- ・全社的にCSRの見本となる優秀な取組に対する社内表彰で子供食堂への協力が2017年表彰対象3件のうちの一つになりました。これからも変わらず支援を続けていきたいと考えています。

- ・支援の幅を広げるとすれば、食材等の運搬支援ができないか、検討してみたいと考えています。また、西松建設（株）の協力会社へ、寄付等の協力を呼びかけていきたいです。
- ・チャイルドケアセンターは行政と密接につながりを持ち、多くの事業を受託している優良な NPO 法人であったので、信頼して協力することができました。何かできないかと考えている企業があるならば、地域の信頼できるパートナーを見つけて相談してみることをお勧めします。